

資 料

肢体不自由のある生徒の自己理解支援におけるデジタル実習日誌の活用について —デュアル実習の振り返りでの自己の課題に関する記述に着目して—

佐 伯 忍*・笠 原 芳 隆**

本稿では、就労を希望している肢体不自由特別支援学校高等部生徒2名を対象に、デュアル実習で使用している実習日誌のデジタル化による自己の課題に関する記述量や記述内容の変化から自己理解の深化と自己理解支援におけるデジタル実習日誌の活用について検討することを目的とした。

その結果、紙媒体に比べ、デジタル媒体では2名ともに実習日誌の「ふり回り」の文字数及び項目数が約1.3倍増加した。また、Aは手の震えに関する「症状の理解・対処」、Bは手先の器用さに関する「作業遂行」に関する記述がともに2倍増加し、Bは「コミュニケーション」に関して評価の内容だけでなく、分析的内容が含まれていた。結果から、ICT機器を活用することで自己への意識を深め、自己理解の深化につなげることができた。振り返りにおける自己理解は重要な課題であり、一人一台端末の機能を生かした活用方法やキャリア・パスポートに位置付けた効果的な活用が今後の課題である。

キー・ワード：自己理解支援、振り返り、デュアルシステム、一人一台端末、キャリア・パスポート

I 問題と目的

肢体不自由特別支援学校高等部卒業後の就職者の割合は4.8%（文部科学省，2022）であり、他の障害種と比べてもかなり低い状況にある。その背景に障害の重度・重複化、多様化があり、特に重度・重複化が著しく、就労分野における社会参加の割合は低いとされている（加藤，2016）。一般就労に向けた肢体不自由特別支援学校の課題として生活経験不足が挙げられている（池田・濱田，2019）。経験不足により将来にイメージがもちにくく、職場体験等により視野を広げることが大切としている（斎藤・斎須・三橋・田中・奥住，2020）。平成31年告示の特別支援学校高等部学習指導要領においても就業体験活動の機会拡充が明記され、ドイツを発祥とする企業での実習と学校での学習を並行して行うデュアルシステムが職業教育の一環として特別支援学校でも広がりつつある。

脇田・藤井・河合・池永・冨永（2015）は、基礎的・汎用的能力の肢体不自由単一障害の児童生徒の課題として「自己他者理解力」「コミュニケーション能力」「社会体験を生かした実践力」が挙げられ、その要因を肢体不自由単一障害の児童生徒数の少なさによる集団学習の困難さとしている。加藤（2016）は、その中で特に自己理解を育む指導は、社会参加の可能性を広げる多様な働き方を選ぶための基礎部分として必須としている。

国立特別支援教育総合研究所のキャリアプランニング・マトリックス（試案）観点解説改訂版（国立特別支援教育総合研究所，2010）の人間関係形成能力の自己理解・他者理解における高等部段階の指導として、達成感や成就感がもてるような体験の積み重ねが肯定的な自己理解につながるとし、産業現場等における実習等の活用を挙げている。末吉・柘植（2021）は、自

閉スペクトラム症学生に対する就業体験を通じた支援では、支援者とともに経験に対する振り返りを実施することが自己理解の深化や本人の適性に応じた進路選択のために重要であるとしている。渡辺・杉山・亀山（2006）は、日誌等で自らの満足感や充足感・有用感などの観点を基に振り返り、教師らと共有することで肯定的な自己理解が図られ、深められるとしている。また、日誌等は目標設定や自己評価を進めるためのガイド・ツールとして主体的な進路選択につながるとしている。

しかし、これまで多くの学校で用いられてきた紙媒体の日誌等では肢体不自由のある生徒にとって上肢の障害から書字に負担がかかり、十分な振り返りができないこともある。また、感覚や認知の困難さから文字の位置や形の捉えにくさ、物事を統合する力や部分と部分の関係をつかむ弱さによる文章構成に課題が見られる場合もあり、身体面だけでなく認知面の困難さも伴う（国立特別支援教育総合研究所，2012）。

GIGAスクール構想によりタブレット端末が急速に普及した。文部科学省（2020）は、特別支援教育におけるICTの活用の視点として、学習効果の向上や情報活用能力の育成と合わせて、障害による学習上または生活上の困難さの改善・克服を挙げている。身体障害による学習上の困難さ、知的障害や発達障害による学びにくさやコミュニケーションの困難さに対してICT機器の活用が有効としている。

障害のある生徒のキャリア発達を促すために、生徒の内面変化を捉えることが重要であるとしている（堀田・伊藤・八田，2014）。そこで、タブレット端末を活用し、実習日誌を紙媒体からデジタル媒体に変更することで入力負担軽減を図り、内面や思考の深化につながり、自己に意識を向けた振り返りがしやすくなるのではないかと考えた。

以上のことから、本研究ではデュアルシステム型校外実習（以下、デュアル実習）の実習日誌をデジタル化し、タブレット端末で入力できるようにした。紙媒体とデジタル媒体の実

* 刈谷市立刈谷特別支援学校

** 上越教育大学

習日誌の自己の課題に関する記述量や記述内容を比較することで、実習日誌のデジタル化による自己理解の深化を明らかにし、自己理解を促進するツールとしてのデジタル実習日誌の活用について検討することを目的とした。なお、本研究ではタブレット端末を利用したデジタル媒体の実習日誌を「デジタル実習日誌」とする。また、本研究は、筆頭著者の所属校校長及び対象生徒の保護者の承諾を得て実施した。

Ⅱ 方法

1 対象生徒

卒業後に就労を希望している肢体不自由特別支援学校高等部の各教科等を中心とした知的代替の教育課程を履修している2年生の生徒A、Bの2名である。

(1) 生徒Aの実態

主障害は脳出血後遺症であり、中学校在籍時に発症した。日常生活動作はほぼ自力で行うことができるが、左手に原因不明な不随意運動が現れることがあり、食事が盛られたトレーなどを運ぶ際は支援が必要となる。個別的教育支援計画の本人及び保護者の願いにも、手の震えによって自分では難しいことについて、自分でできる方法で取り組みたいと記載されている。発症前の中学校では通常学級に在籍し、半年ほどの入院生活を経て、高等部から特別支援学校に入学してきた。理解力などの知的機能に問題はないが、後遺症により注意力や記憶力にやや影

響が見られる。しかし、自身の病気や障害については理解しており、卒業後は障害者雇用での就職を希望している。

書字に関しては右利きであることから左手に震えが出て書くこと自体は問題ないが、手の震えにより紙を押さえることができないため、症状が治まるまで書くことを中断することもある。タブレット端末での文字入力は症状が現れても入力への影響が少ないため、比較的スムーズに行うことができる。

(2) 生徒Bの実態

主障害は脳性まひであり、長い距離の移動は杖や車椅子を使用しているが、移動以外の日常生活動作はほとんど問題ない。ただ、手に軽度のまひがあることから衣類の着脱などは補助を必要とすることもある。B自身も指先を使う細かい作業に対して苦手意識をもっており、自己評価の高さからできないことを受け入れられずに落ち込んでしまうことがある。

また、軽度の知的障害を伴っているが、日常会話などの生活レベルでのコミュニケーションは問題ない。しかし、移動の困難さなどから行動範囲が限られており、新しい環境では声が小さかったり、相手の顔を見ることができなかったりと慣れるのに多少時間がかかり、自信のなさが見られる。

書字に関しては手先に軽度のまひがあり、書字自体に問題はないが、筆記具を準備したり、紙を押さえて字を消したりなどの動作に時間がかかる。また、B自身はパソコンでの文章入力などに対して自信をもっている。

月 日 () 実習日誌

内容					
目標					

評価項目	自己評価				他者評価
	できた	課題あり	できない	なし	
挨拶、返事、報告	○	△	×	■	
整理整頓	○	△	×	■	
安全	○	△	×	■	
質問、依頼	○	△	×	■	
礼儀、言葉遣い	○	△	×	■	
集中、丁寧さ	○	△	×	■	
作業効率	○	△	×	■	

ふり返し

a 紙媒体

月 日 曜日 氏名 ()

目 標		
実習内容		
自己評価	3:よくできた 1:できた 0:課題あり	
挨拶、返事をしっかりとすることができたか。		
身だしなみはきちんと整っていたか。		
集中して仕事に取り組むことができたか。		
分からないことはすぐに自分から質問するなどして解決することができたか。		
見落としがないか確認しながら仕事をすることができたか。		
作業がしやすいように整理整頓を心がけることができたか。		
自分ができることは進んで取り組むことができたか。		
ふり返し		
次回の課題		

b デジタル媒体

図1 実習日誌

表1 全体及び媒体別の実習日誌の「ふり返し」の記述内容のカテゴリー

カテゴリー	全体 (n=50)	媒体	
		紙 (n=19)	デジタル (n=31)
コミュニケーション	21 (42.0%)	7 (36.8%)	14 (45.2%)
作業遂行	16 (32.0%)	5 (26.3%)	11 (35.5%)
症状の理解・対処	7 (14.0%)	2 (10.5%)	5 (16.1%)
安全行動	5 (10.0%)	4 (21.1%)	1 (3.2%)
健康管理	1 (2.0%)	1 (5.3%)	0 (0.0%)

2 実習日誌の概要

デュアル実習開始当初に使用していた紙媒体の実習日誌は、A 4サイズ1枚に「内容」「目標」「評価項目」「ふり返し」の4項目で構成されている(図1-a)。デジタル媒体の実習日誌でも基本的な項目は紙媒体と大きく変わりはないが、「評価項目」の見直しや紙媒体で「ふり返し」に記入していた「次の課題」を新たに設けるなど一部変更した(図1-b)。また、デジタル媒体のデータは普段授業で使い慣れているExcelで作成し、教員用パソコンと生徒用のタブレット端末にインストールされているTeamsで共有できるようにした。

3 手続き

(1) デュアル実習の概要

デュアル実習は、20XX年5月から20XX+1年2月までの期間、週1回半日、学校近隣の事業所でパチンコ台の分解・解体作業を行った。なお、実習日誌の記入・入力は自宅で行い、翌日にその内容の確認を担当教員が行い、必要に応じて助言や励ましの言葉をコメントとして記入・入力した。

(2) 分析対象

デュアル実習の実施期間内の20XX年5月から9月までの実習日誌(紙媒体・デジタル媒体)の「ふり返し」の記述文を分析対象とした。紙媒体は20XX年5月から6月までに使用した4回分、デジタル媒体は20XX年6月から9月までに使用した6回分(Aは欠席等から4回分)とした。

(3) 分析方法

実習日誌の「ふり返し」の記述文の1文を一項目とし、内容が2文にわたる場合は2文を一項目とした。各項目をアフターコーディングし、就労に向けた自己の課題の観点から就労支援のための訓練生用のチェックリスト(2009, 障害者職業総合センター)を参考にコード化した。コード化したものを媒体別に分類し、記述量と記述内容について評価的内容(概要)と分析的内容(概要)を視点として紙媒体とデジタル媒体で比較した。

Ⅲ 結果

1 「ふり返し」の記述文の文字数の変化

A, Bの「ふり返し」の記述文の平均文字数は、紙媒体でAは96.3文字, Bは128.3文字, デジタル媒体で, Aは123.0文字, Bは168.7文字であった。平均文字数は、紙媒体と比べてAは1.28倍, Bは1.31倍増加しており, A, Bともにデジタル媒体では約30%の文字数が増加した。

2 「ふり返し」の自己の課題に関する記述内容の変化

「ふり返し」の記述文の総項目数は, Aは21項目, Bは34項目であった。紙媒体には「次回は安全にスムーズにやることをがんばります。」など次の課題に関する記述がいくつか見られ, デジタル媒体では「次の課題」に記入されていることから分析対象から除外した。その結果, Aは20項目, Bは30項目を分析対象とした。

全体及び媒体別の各カテゴリーの項目数は表1のとおりである。全体ではA, B合わせて50項目あり, 紙媒体は19項目, デジタル媒体は31項目であった。A, B合わせた実習の回数は紙媒体では8回, デジタル媒体では10回であり, 実習1回あたりの項目数は, 紙媒体2.4項目, デジタル媒体3.1項目と1.3倍増加した。文字数もデジタル媒体で約1.3倍増加したことから, 1項目あたりの文字数の変化は見られなかった。

記述内容全体で最も多かったものが「コミュニケーション」で21項目(42.0%), 次いで「作業遂行」の16項目(32.0%)であった。媒体別では, 紙媒体, デジタル媒体ともに最も多かったのが「コミュニケーション」であり, 次いで「作業遂行」であった。3番目は紙媒体では「安全行動」であったのが, デジタル媒体では「症状の理解・対処」であった。

(1) 生徒Aの自己の課題に関する記述内容の変化

Aの「ふり返し」の記述内容については表2のとおりである。項目数の比較では, 紙媒体9項目, デジタル媒体11項目であり, 実習1回あたり紙媒体2.3項目, デジタル媒体2.75項目と1.2倍増加した。

記述内容の比較では, 紙媒体で手の震えに関する「症状の理解・対処」は2項目(22.2%)であり, 「作業遂行」3項目(33.3%), 「コミュニケーション」2項目(22.2%), 「安全行動」「健康管理」1項目(11.1%)と他の項目と大差はなく特定の記述内容に偏ることはなかったが, デジタル媒体では「症状の理解・対処」が5項目(45.5%)と記述全体の半分近くを占め, 全体に占める割合も紙媒体22.2%からデジタル媒体45.5%と約2倍に増加した。他の「作業遂行」は3項目(27.3%), 「コミュニケーション」は2項目(18.2%)であり, 紙媒体と比べて記述全体に占める割合は低下した。Aは手の震えはあるが, 初めての作業でも比較的問題なく行うことができ, 初対面の人でも臆せずに話すことができることから「作業遂行」や「コミュニケーション」に関しては課題として感じておらず, 記述が減ったことが推察される。

(2) 生徒Bの自己の課題に関する記述内容の変化

Bの「ふり返し」の記述内容については表3のとおりであ

表2 Aの実習日誌の「ふり返り」の記述内容

カテゴリー	記入例	紙 (n=9)	デジタル (n=11)
症状の理解・対処	<ul style="list-style-type: none"> ・左手の不随意運動も作業に影響がないように抑えついたり、力を抜いたりして治まるようにしました。(デジタル) ・今日の実習で左手の不随意運動が日に日に大きくなっていることに気がきました。(デジタル) ・未だに力を抜いても震えて、どうしたらいいのかがよくわからないけど、二学期になって実習をするときも震えが少なく、効率よくできるようにしたいです。(デジタル) 	2 (22.2%)	5 (45.5%)
作業遂行	<ul style="list-style-type: none"> ・ペンチの握り方に悩んでいて力が加わらなかったのでちゃんと合う握り方を見つけて効率を上げられるようにしたいです。(紙) ・ねじや配線を外した後のプラスチックを光に当てて、部品の取り忘れがないかを確認できたので次回以後も続けたいです。(紙) 	3 (33.3%)	3 (27.3%)
コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> ・あいさつは、事業所に入るときにいつも以上大きな声で出来たことが良かったです。(紙) ・できなかったことに対する質問は少し、質問するまでに時間がかかってしまったのもっと早く質問できるようにしたいです。(デジタル) 	2 (22.2%)	2 (18.2%)
安全行動	<ul style="list-style-type: none"> ・ハサミが開いていたまま置いてしまったので安全面が△でした。(紙) 	1 (11.2%)	1 (9.0%)
健康管理	<ul style="list-style-type: none"> ・事業所中は暑くて汗だくになってしまっていたので次回以降は天候によって上の服を着ていくかを考えていきたいです。(紙) 	1 (11.2%)	0 (0.0%)

※太ゴシック体は自己の課題と関連のあるカテゴリー

表3 Bの実習日誌の「ふり返り」の記述内容

カテゴリー	記入例	紙 (n=10)	デジタル (n=20)
コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> ・特に困ったことをがなかなか自分の口から言うことができなく挨拶や返事なども緊張して小さな声などになってしまいました。(紙) ・分からないことも自分から積極的に言うことが出来たので良かったです。(デジタル) ・今まで忙しくないかなとかかけっこう周りを見てしまってたただ時間が過ぎていだけだったけど、今回はどんどん質問をして作業効率が上がって良かったと思います。(デジタル) ・分からないことを質問する時に周りを見てしまい、今質問して大丈夫かなと思ってしまい無駄な時間が流れ作業効率が悪くなってしまいました。(デジタル) 	5 (0) (50.0%)	12 (4) (60.0%)
作業遂行	<ul style="list-style-type: none"> ・作業効率も前回よりスムーズにできずネジを取るのに時間がかかってしまいました。(紙) ・ほとんど困ることもなく自分で仕分けて自分で細かいパーツを取ったり自分で判断などが出来るようになりました。(デジタル) ・ネジを取るときに電動ドライバーを真っ直ぐに立てることが出来ず、思ったより上手く取ることが出来なくて悔しかったです。(デジタル) 	2 (20.0%)	8 (40.0%)
安全行動	<ul style="list-style-type: none"> ・メガネをかけわすれたりしてしまってちょっと安全面ではよくなかったかと思っています。(紙) 	3 (30.0%)	0 (0.0%)

※太ゴシック体は自己の課題と関連のあるカテゴリー

※下線部は分析的内容の記入例。コミュニケーションの項目数のカッコ内は分析的内容の項目数を表す。

る。項目数の比較では、紙媒体10項目、デジタル媒体20項目であり、実習1回あたり紙媒体2.5項目、デジタル媒体3.3項目と1.3倍増加した。

記述内容の比較では、紙媒体とデジタル媒体ともに最も多かったのが「コミュニケーション」であり、新しい環境に慣れるのに時間がかかることからBにとってコミュニケーションは重要な課題として捉え、媒体別の記述全体に占める割合も紙媒体5項目(50.0%)、デジタル媒体12項目(60.0%)と大きな変化は見られなかった。しかし、コミュニケーションに関して紙媒体では「質問も自分から積極的に声をかけることができたので良かったです。」など評価的内容のみであったのが、デジ

タル媒体では「今まで忙しくないかなとかかけっこう周りを見てしまってたただ時間が過ぎていだけだったけど、今回はどんどん質問をして作業効率が上がって良かったと思います。」など実習時の心情や行動など状況を客観的に捉えた分析的内容が12項目中4項目含まれていた。また、手先の器用さに関する「作業遂行」は紙媒体では2項目(20.0%)であったのが、デジタル媒体では8項目(40.0%)と全体に占める割合が2倍に増加した。「安全行動」が3項目(30.0%)から0項目(0.0%)に減少し、実習に慣れるに従って安全面での指導が減ったことによる影響と考えられる。

IV 考察

1 デジタル実習日誌による自己理解支援の効果

結果から、実習日誌をデジタル化したことでA、Bともに「ふり返り」の記述量及び自己の課題に関する内容が増加した。また、Bについては課題であるコミュニケーションに関して分析的内容が増加し、記述内容の質的变化も見られた。

小沢（2009）は、自己理解の場としての文章作成について以下のように述べている。自己理解は自分と照らし合わせ、自分を見つめるという思考の作業を必要とし、文章を書くことで自分の感情、思考を文字に乗せて表現することにより自分との照らし合わせや自分を見つめることが行いやすく、文章を書くことが自己理解につながるとしている。実習日誌を書くということは、実習時の感情や思考を対象化した自分と客観的に照らし合わせ、見つめたことを文章として表すことであり、小沢（2009）の自己理解の場としての文章作成であると言える。しかし、書字に困難がある場合、書くことに意識が傾き、自分との照らし合わせや自分を見つめる思考の作業が十分にできない恐れがある。また、手で書くことに対して苦手意識がある場合は、書くことへの意欲低下を招き、十分な振り返りができないこともある。ICT機器を障害による困難さを支援する技術であるアシスティブ・テクノロジーとして活用することで、手書きと比べ容易に文章を作成することが可能である。ICT機器の活用は身体面の支援だけでなく、文章産出の際の心理的操作負担を軽減し、認知的努力の減少に等しいとしている（細谷、2003）。Dunn and Miller(2016)もテクノロジーを利用することで目と手の協調運動の問題を軽減し、文章表現の動機づけや意欲の喚起につながることを指摘している。

本研究では、時間的経過の影響については検討していないが、山田（2004）は自己形成について時間軸の拡張に加え、経験を重要な要素としている。自己形成は自己内対話による意味づけが位置づけられることによって達するとし、現在という瞬間にその都度自己内対話によって書き換えられるとしている。つまり、経験に対する自己内対話がICT機器の活用により一層深まり、その結果、自己理解に影響を及ぼしたと考えられる。また、教員からのコメントなどのフィードバックについて、紙の方がデジタルと比べて参照しやすいとされており（山田・岡本・島田・木村・大久保・小島・緒方、2016）、同じフィードバックであっても媒体の違いによる自己理解に与える影響について検討していく必要がある。

以上のことから、デジタル実習日誌の活用は、書字に対する身体的・心理的負担の軽減を図り、実習での体験を自分と照らし合わせたり、見つめたりする思考の作業の深化につながり、記述量の増加や記述内容の変化から自己理解が深まったと考えられる。

2 自己理解支援におけるデジタル実習日誌の今後の活用

実習日誌の果たす役割についてははじめに述べたとおりである。今井・前原（2022）の調査では、実習の振り返りでの生徒の行動変容を促す有効的な支援として「自己理解（職業適性や自分の特性への理解）を深めるための支援」が最も多かった。ただ一方で、振り返りでの課題として「自己理解を促進する取組」が多く挙げられており、このことから自己理解促進

の困難さがうかがえる。多くの特別支援学校では就労に向けた実習で実習日誌を活用しており、振り返りツールとして実習日誌の果たす役割は大きい。今井・前原（2022）は自己理解を促進するために生徒の実態に応じた手立てを講じ、その結果による生徒の行動変容の検証が大切としている。GIGAスクール構想により配備された一人一台端末を活用することで、一人一人の実態に応じてより柔軟な対応が可能となる。例えば、実習の様子を撮影した動画やグラフや色で表した評価などの視覚的な支援方法や、今回は授業担当者からのフィードバックによる効果は検証していないが、一人一台端末の双方向性を生かした対話的な支援方法などさまざまな方法との併用が考えられる。その効果について自己理解の観点から検証し、効果的な活用方法を探ることで自己理解を促進するツールとしてデジタル実習日誌の可能性を広げることにつながる。また、キャリア教育の充実に向けて導入されたキャリア・パスポートの活用が検討される中、GIGAスクール構想の一環としてデジタルポートフォリオとして活用する試みが見られるようになってきた。将来的には、デジタル実習日誌をキャリア・パスポートの一部として位置付けることで生徒の実態に応じたアクセシブルな自己分析ツールとしての活用も考えられる。そして、デジタルデータは蓄積することが可能であることから、蓄積したデータを基に生徒の課題の検討や指導方法の改善などキャリア教育の充実につながることを期待される。

文献

- Dunn, M. & Miller, D.(2016) Improving story writing: Integrating the story mnemonic strategy with ipad apps for art and keyboarding. *International Journal for Research in Learning Disabilities*, 3(1), 11-28.
- 細谷由理子（2003）ワードプロセッサによる文章産出過程の特徴－手書きとの差異に着目して－. *人文科教育研究*, 30, 33-47.
- 堀田千絵・伊藤一雄・八田武志（2014）障害を有する児童・生徒のキャリア発達を促す教育課程及び指導法の構築－発達障害、病弱、肢体不自由、重症心身障害者に対する特別支援学校の進路指導実践から－. *人間環境学研究*, 12(2), 135-143.
- 池田早希・濱田豊彦（2019）一般就労に向けた特別支援学校の取り組みと支援状況における調査研究. *東京学芸大学紀要総合教育科学系*, 70(1), 459-467.
- 今井彩・前原和明（2022）特別支援学校高等部における現場実習の効果的なフィードバックの在り方－秋田県内特別支援学校への調査から－. *Journal of Inclusive Education*, 11, 56-67.
- 加藤隆芳（2016）肢体不自由児のキャリア発達を促すための指導方法、障害特性を踏まえた就労支援方法の開発に係る実践研究. *筑波大学附属桐が丘特別支援学校研究紀要*, 52, 13-32.
- 国立特別支援教育総合研究所（2010）知的障害教育におけるキャリア教育の在り方に関する研究－「キャリア発達段階・内容表（試案）の活用による実践モデルの構築を目指して－」. 国立特別支援教育総合研究所（2012）肢体不自由のある児童生徒に対する言語活動を中心とした表現する力を育む指導に関する研究－教科学習の充実をめざして－.
- 文部科学省（2020）特別支援教育におけるICTの活用について

- | 文部科学省2020年9月11日, <https://www.mext.go.jp/content/20200911-mxt_jogai01-000009772_18.pdf> (2022年10月11日)
- 文部科学省 (2022) 特別支援教育資料 (令和3年度) | 文部科学省2022年12月6日, <https://www.mext.go.jp/content/20221206-mxt_tokubetu02-000026303_2.pdf> (2023年1月31日)
- 小沢一仁 (2009) 大学の授業において自己理解を目指す文章を書くこと. 東京工芸大学工学部紀要, 32(2), 9-19.
- 斎藤遼太郎・斎須依恵・三橋翔太・田中亮・奥住秀之 (2020) 肢体不自由特別支援学校におけるキャリア教育の指導内容と教員の意識. 茨城キリスト教大学紀要Ⅱ, 社会・自然科学, 54, 131-141.
- 末吉彩香・柘植雅義 (2021) 自閉スペクトラム症学生に対する就業体験における振り返りシートの作成と活用ー学生の自己理解・自己効力の変化に着目した振り返り面談の実践ー. 障害科学研究, 45(1), 269-284.
- 障害者職業総合センター (2009) 就労支援のためのチェックリスト活用のための手引き.
- 脇田耕平, 藤井梓, 河合俊典, 池永真義, 富永光昭 (2015) 肢体不自由特別支援学校における「新しい」キャリア教育の実態と課題ー近畿2府4県の肢体不自由特別支援学校への質問紙調査を通してー. 大阪教育大学紀要第Ⅳ部門教育科学, 64(1), 177-186.
- 渡辺明広・杉山晴美・亀山修児 (2006) 主体的な進路選択ー知的障害養護学校における進路学習についての授業研究. 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 12, 133-1.
- 山田政寛・岡本剛・島田敬士・木村拓也・大久保文哉・小島健太郎・緒方広明 (2016) eポートフォリオは省察に有効か? ポートフォリオの媒体の違いが学習者の主観的效果に与える影響の分析. 基幹教育紀要, 2, 61-72.
- 山田剛史 (2004) 過去ー現在ー未来にみられる青年の自己形成と可視化によるリフレクション効果ーライフヒストリーグラフによる青年理解の試みー. 青年心理学研究, 16, 15-35.